第527号
令和7年
1月20日

すまいるたうん

発行元
東京新聞
南千住専売店
TEL3803-1781
発行責任者
鬼塚　佳代子
TEL090-2657-0300

吉原の話（平成23年5月　杉山六郎氏の講演資料より）

「日に三箱散る山吹は江戸の華」

江戸市中で一日に千両（約一億円位）の小判が動く江戸三千両と謳われた三ヶ所の場所のひとつ「新吉原」。

すまいるたうん「コツ通りの一口話」の執筆者の杉山六郎氏の講演会資料より抜粋した吉原の話を掲載します。

旧吉原は遊女屋、西田屋主人が慶長10年（1605）に幕府に遊郭設置を陳情し元和3年（1617）に、江戸初の遊郭が、現在の日本橋堀留町2丁目あたりに1万5千坪の広さの面積で開業した。葭の茂るところを埋め立てて造ったことから、葭原と呼ばれていた。そして寛永三年（1626）に縁起のいい文字にかえて吉原となった。武士の廓遊びができるようになった。

明暦3年（1657）の振袖火事で旧吉原は浅草田圃日本堤に移転し、新吉原となり、この時から夜間営業が認められ、社交場として発展。一大文化の発祥の地となる。（遊女は3～4千人、従事者は1万人位）入口は大門のみ、周りは遊女が逃げられないようにお歯黒どぶで囲まれている。

◆遊女の人生

7～8歳で人買や女衒に売られたり、誘拐されて、禿として遊郭で働く。（冷害、干ばつ等の飢饉の時には遊女増えた）年季（年季奉公の略。一年を一季とする）は10年、15歳で遊女としてデビュー。思春期の18歳位になると恋愛感情も生まれるが、店側は、客との本気の恋愛は認めない。足抜け（脱走）しようものなら厳しい折檻が待っていた。10年を耐え抜けずに、心中に走る女性が多かった。25歳で年季明けだが、過労や病気（結核や梅毒）で死亡する者が多く、無事年季を迎えられる者は少ない。上客に身請けされる人は幸運な女性。

◆ありんす言葉（廓言葉で吉原言葉）

地方の女性が流入して各地のお国言葉（方言）が使われ、混在したため、優艶な吉原言葉に統一した。ありんす＝あります　ざんす＝です　わっち＝私　なんし＝してください

◆遊女の格付け

最初の頃…太夫、格子、局、切見世、端女郎、花魁、傾城

寛文（1661）…散茶、梅茶

宝暦（1751）…客層が変わり武士・大名が行き詰まり、町人の天下となる。

上級…（座敷持、部屋持）中級クラス…散茶が呼出、昼三、付廻、呼出※散茶とは粉茶のことで、「客をふらない」遊女をいう。

下級…廻し部屋（大部屋で相手をする）

花魁など芸後に通じ、教養の高い上級遊女の対応は、1回目は初会（茶屋で顔合わせ）、2回目は裏（茶屋で顔合わせ）、3回目馴染みで、客は茶屋で芸者を呼んで宴会を行い、その後、やっと丑三つ時（2時～2時半）に廓に入ることができる。

◆遊女の一日（生活）

午前10時～11時頃に起き出し、朝食は部屋持は自分の部屋で、新造や禿は1階大広間で食べた。飯は盛切り一杯と決まっていたので、いつも腹をすかせていた。朝食の後、朝9時から内湯に入れる。ただし、居続客から先に入る。揚屋町は銭湯や商店があり、揚屋町の銭湯（朝から夜8時迄営業）を気分転換に利用した。髪洗い日は毎月27日、7月だけは13日に行い、年2回、元旦と7月13日が遊女の休日だった。病気や妊娠した場合は今戸・山谷・三の輪にあった寮へ行った。

伏見町では、路上で営業していた娼婦を集めて店に持たせた。伏見町の遊女より下の最下位の遊女は西河岸、羅生門河岸で畳2畳位の場所を借りて安い金額で仕事していた。

江戸時代より官許の吉原以外の私娼がいた地は岡場所と言われ、深川、築地、品川、新宿、千住、小塚原、湯島など江戸33ヵ所と言われていた。

見返り柳

明治27年時代